



滝野隆浩 社会部編集委員
©若林健次

「バリ島の村では頭蓋骨と大腿骨を祭壇に並べて村を守っている」「モアイ像の基壇の中にも骨が……」。世界45カ国のお墓を旅した聖徳大学の長江曜子教授(61)の話は、放っておくとあらぬ方へ飛んでいく。バリの風葬とか、イースター島まで調べていたとは。余談に気を取られているうちに、先生との紙上旅行は、欧州から大西洋を渡ってアメリカに着いた。

アメリカは広い。したがって葬送のやり方も東部、西部、南部でだいぶ違う。ただキリスト教の国だけあって基本は土葬。「復活思想によって必要なのは骨より肉体。彼らにとって墓は『復活を待つベッド』なんです」と先生は言う。病院で亡くなると、土葬される遺体は自宅に戻ることもなく葬儀社の搬送車に乗せられる。そして「エンバーミング」と呼ばれる遺体修復・保存の技法でメイキャップされ、ドレスやスーツを着せられて、遺族と対面する。

一方、火葬率はいま40%前後だという。遺族とはまったく対面せずに火葬場で焼かれ、グラインダー(研削器具)で碎かれる。遺骨というより遺灰に近い。遺族が集まってみんなで「骨上げ」する日本とは大違いである。遺灰は、袋に詰めて箱に入れられ郵送されて遺族のもとに届

「死」も個人尊重の米国

く。また、金、銀、木製、陶器などの骨つぼに直接入れられるケースも。あとはお墓に埋葬されたり、納骨堂や自宅に安置されたり、散骨されたりする。

長江先生は1980年代後半、全米墓園協会(1887年創立)を取材し、さらに同協会大学(「全米お墓大学」、4年制の夏季講座)を卒業している。資本主義の総本山アメリカで、最先端の葬送ビジネスのマーケティングや墓園経営学を学んだ。そこで徹底的にたたき込まれたのは、「メモリアリゼーション」の考え方だった。つまり、故人を記録し、記憶し、追悼すること。大切な人を亡くして悲しみのうちにいる人に何が必要なのか、その人に合わせて提案する。講義では「お客様のカウンセラー的存在にならなければ」と力説された。それが米国立「葬送ビジネス」「デスクエアサービス」の本質なのだろう。同様の考えは日本国内でも、最近よく言われるようになったが、かの地では四半世紀前にはすでに定着していた。

米西部、サンフランシスコ湾の洋上で、先生は散骨まで経験した。研修中、ある家族の親族が来なかったので「最後の大役」が回ってきた。経典が読まれ、葬儀士の資格を持った船長の合図で船尾から遺灰をまく。コバルトブルーの海がそこだけ白くなって……。「決してドライじゃないんです。遺族はすっと泣きどおしました」。米国では「死」に際しても、個人の考えが尊重される。だから葬送ビジネスが発達してきた。

せっかくアメリカに来たのだから、と先生は言う。「ベトナム戦争戦没者慰霊碑は、絶対、見ておへべきです」